

主日礼拝説教「あなたがしなければ誰がする？」予稿

日本基督教団石神井教会 2021年11月14日終末前主日

【旧約聖書日課】出エジプト記 6章2～13節

²神はモーセに仰せになった。「わたしは主である。³わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった。⁴わたしはまた、彼らと契約を立て、彼らが寄留していた寄留地であるカナン土地を与えると約束した。⁵わたしはまた、エジプト人の奴隷となっているイスラエルの人々のうめき声を聞き、わたしの契約を思い起こした。⁶それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい。わたしは主である。わたしはエジプトの重労働の下からあなたたちを導き出し、奴隷の身分から救い出す。腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う。⁷そして、わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であり、あなたたちをエジプトの重労働の下から導き出すことを知る。⁸わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると手を上げて誓った土地にあなたたちを導き入れ、その地をあなたたちの所有として与える。わたしは主である。」⁹モーセは、そのとおりイスラエルの人々に語ったが、彼らは厳しい重労働のため意欲を失って、モーセの言うことを聞こうとはしなかった。

¹⁰主はモーセに仰せになった。¹¹「エジプトの王ファラオのもとに行き、イスラエルの人々を国から去らせるように説得しなさい。」¹²モーセは主に訴えた。「御覧のとおり、イスラエルの人々でさえわたしに聞こうとしないのに、どうしてファラオが唇に割礼のないわたしの言うことを聞くでしょうか。」¹³主はモーセとアロンに語って、イスラエルの人々とエジプトの王ファラオにかかわる命令を与えられた。それは、イスラエルの人々をエジプトの国から導き出せというものであった。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 11章17～29節

¹⁷信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。¹⁸この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。¹⁹アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。²⁰信仰によって、イサクは、将来のことについても、ヤコブとエサウのために祝福を祈りました。²¹信仰によって、ヤコブは死に臨んで、ヨセフの息子たちの一人一人のために祝福を祈り、杖の先に寄りかかって神を礼拝しました。²²信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子らの脱出について語り、自分の遺骨について指示を与えました。

²³信仰によって、モーセは生まれてから三か月間、両親によって隠されました。その子の美しさを見、王の命令を恐れなかったからです。²⁴信仰によって、モーセは成人したとき、ファラオの王女の子と呼ばれることを拒んで、²⁵はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待される方を選び、²⁶キリストのゆえに受けるあざけりをエジプトの財宝よりまさる富と考えました。与えられる報いに目を向けていたからです。²⁷信仰によって、モーセは王の怒りを恐れず、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、耐え忍んでいたからです。²⁸信仰によって、モーセは滅ぼす者が長子たちに手を下すことがないように、過越の食事をし、小羊の血を振りかけました。²⁹信仰によって、人々はまるで陸地を通るように紅海を渡りました。同じように渡ろうとしたエジプト人たちは、おぼれて死にました。

【福音書日課】 マルコによる福音書 13章5～13節

5イエスは話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。6わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。7戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。8民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。9あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。10しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。11引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労してはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。12兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。13また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

「エジプトから導き出せ！」【こども説教のために】

来週の「終末主日・収穫感謝日」を前に、秋の実りの奉献をいただきましたので、収穫感謝の祈りと共に、その恵みを分かち合うことになりました。

わたしたちの人生を季節にたとえて、晩年を「秋」と言い表すことがあります。人生の実りを収穫し、後進と共に分かち合う季節ということでしょう。すべての働きを終えて、実りの蓄えによって人生をまっとうするとき、と考える方もあるかもしれません。「人生100年時代」と言われても、80歳を過ぎてなお新しい働きを始めようという人は、ほとんどいらっしゃらないはずです。それもそのはず、一昔前であれば60歳までで人生の実りを得るための働きを終え、その後は収穫の恵みを享受すればよいと思われていたのです。

「出エジプト記」のモーセが神から新しい使命を与えられて、それまで何十年も安住してきたところから引き出されたのは、80歳の時のことです。彼は、三千年以上前の人です。現代人でも大いに躊躇しないではられない使命に、彼が戸惑わなかったはずはありません。殊に、彼に与えられた使命には、多くの人々に語り、説得する働きが含まれていたのです。口下手を自認するモーセには、とても務まる使命だとは思えませんでしたから、その使命を受けることを拒もうとしました。けれども、神は告げられたモーセに対する命令を撤回されません。それが、ほかでもないモーセに対する使命だったからです。

モーセは、人生の「秋」をどのように見定めるのか、見直しを迫られたのです。それは、80歳の者だけでなく、若者にも子どもにも向けられた、神からの問いかけです。人生の「秋」に向かって、わたしたちは、どのような実りのために働き、どのようにその恵みを受け取り、用いるのか。

イスラエルの人々の中へと向かわせられたモーセは、彼らと実りの恵みを分かち合う歩みを始めました。それは幸いな道だったと、聖書は教えるのです。

「わたしは主である」

モーゼの前半生を、「出エジプト記」は、短い物語として伝えています。

彼は、エジプトで重労働を課せられていた奴隷状態のヘブライ人の家に生まれながら、ファラオの王女の子として育てられ、王子同様の人生を歩み始めていたのです。ところが、あるとき、自分が育てられた王宮から追われることとなります。「ヘブライ人への手紙」は、それが王宮生活にふけることを拒んだモーゼ自身の意志であったように語っていましたが、「出エジプト記」が物語るのは、彼が意図せずして王宮を追われる身になったということです。

「ヘブライ人への手紙」は、モーゼという人物を少しばかり美化しすぎているようにも見えます。けれども、それを偽りとまでは言えないでしょう。事実は一つであっても、わたしたちは、過去の出来事の意味するところについて、異なる視座から異なる見方をするようになることがあるのです。「ヘブライ人への手紙」は、モーゼの物語全体を見渡したときに、モーゼならばあの王宮追放という負の出来事をどのように理解し直したのだろうか、問うたのでしょう。そして、そこに、神の御心があつたと理解したときに、モーゼ自身があの出来事を自分自身の意志によって受け入れた出来事として語り得るとしたのです。それは、わたしたちが自分の人生を語る上でも、大切な視点に違いありません。

「出エジプト記」は、しかし、「ヘブライ人への手紙」とは異なる視座から、モーゼの物語を進行させているようです。

モーゼは、80歳にして人生の大きな転換点を迎えたのです。それは、神との出会いによって起こったことでした。「わたしは（が）主である」と直接迫って来られる神との出会いが、モーゼの人生を大きく変えたのです。

信仰者の家庭に生まれ育って、まっすぐに信仰の歩みを始められる方があります。一方で、同じ家庭に生まれ育っても、信仰の歩みに立ち入れなくなる方もあります。代々の信仰だからといって、自ずと自分も同じ信仰を身に着けるようになる、というわけではないのです。「生まれながらの信仰者はいない」のです。とは言え、信仰の家庭に生まれ、また信仰者のいる家族の中で人生を歩むということは、その人の人生にとって小さなことではないはずで、さまざまな理由で信仰の歩みに立ち入らないでこられた方が、晩年になってご自身の意志でその道を選び取られることも少なくないからです。その決断に至るまでに、生まれ育った家庭や、祈り続けられていた家族の信仰が大いに影響を与えてきたことは、間違いないのです。

モーゼにとって、神信仰は、先祖伝来のことでした。彼がエジプトの王宮を追放されて逃れた先も、ミディアン人の祭司の家でした。しかし、その彼が、神信仰を自分自身のこととして受けとめたのは、80歳になってからです。その時、彼は、「わたしは主である」という神と出会う経験をしたのです。

導き入れられる日まで

旧約聖書で「主」と訳されているのは、ヘブライ語アルファベット四文字の神の名です。読み方が不明のまま、ユダヤ教徒はその四文字を「わたしの主」という意味の別の単語の音「アドナイ」で読みます。モーセに対して繰り返し「わたしは主である」と告げられた神は、ご自身の名を名乗られているのです。

不思議なことに、神はその「主」という名を、モーセラヘブライ人の先祖である族長アブラハム、イサク、ヤコブには知らせなかったと言われています。とは言え、「創世記」の族長物語を丁寧に読んでみると、アブラハムやヤコブが神に向かって「主よ」と呼びかけている場面がないわけではありません。神のほうに彼らに対してご自身の名を名乗られなかったということであって、彼らは神の名をどこかで知っていたのかもしれませんが。あるいは、「全能の神」という呼称で現れられたとも言われていますので、族長らは、神との間で公式にはその名で関係を結ばれていたということなのかもしれません。

大切なことは、モーセにとって神を知ることは、神の名を知ることと切り離せなかったということなのでしょう。それも、もっとも親しい関係の中で用いられるような呼び名を知ることが、モーセと神の関係の土台になったということなのではないでしょうか。確かに神は、さまざまな名で現れられ、呼ばれるお方です。それを人の分際で、「名前は一つに固定してください」とは言えませんし、言う必要も無いでしょう。わたしたち人間同士であっても、互いの関係によって呼び名は違ってくるのです。

モーセが、先祖の神を自分自身の神として知り、神の御心のうちに自分の人生に与えられたご計画として使命を受けとめるようになるために、神は、とっておきの呼び名をモーセに教えられたのです。「今まで、だれにもこの名で呼んでよいと言わなかったけれども、君だけはそう呼んで良いよ」と、モーセは、神との特別な関係の中に招き入れられたのです。神と人との親しい関係、「**あなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる**」と言われるような関係に導き入れられたのです。

そのような経験を、わたしたちもどこかでしてきたのではないのでしょうか。そのような経験を、わたしたちは、求めてもよいのではないのでしょうか。モーセは、イスラエルの人々に、それを求めるように呼びかけることを使命として与えられたのです。それは、「エジプト」という地から導き出され、「カナン」という約束の地へ導き入れられることとして、物語られます。そこは、神と人との親しい関係を歩み始めるところなのです。モーセ自身が、「わたしは主である」と名乗られる神と親しい関係に入れられたとき、彼は、すべての人が同じように神と親しい関係に入り、新しい人生の道を知るようになることを願い、そのために仕えることに人生の実りの恵みを見るようになったのです。